人キラリ★話題の「ひと」

大森 陽介（ようすけ）さん
（仙波町）

○プロフィール
１９８７年（昭和６２年）生まれ。
佐野高校、成城大学文芸学部文化史学科卒。
各種の仕事を経験したのち出家し、山形町報恩寺副住職。

会社勤務を辞め、僧侶として出家

お坊さんは寺に生まれた人がなるという印象が強いですが、大森さんは、お寺出身ではありません。大学卒業後、公務員の臨時職員や民間会社の勤務後、出家得度（とくど）し、僧侶としての修行を継続中です。本人によれば、人一倍不器用で、会社勤めは長続きしなかったそうです。その自分の生き方を何とかしようと思い、ネットで検索。坐禅会を知り参加したのが、25歳（２０１２年）の頃で「雑念を捨てて、呼吸に集中するように」という報恩寺伊藤賢山住職の指導を受けます。その後も坐禅会に参加。ついには得度し「陽春（ようしゅん）」の名を受け、専門道場の雲水修行を28歳で始めました。鎌倉円覚寺、横田南嶺（なんれい）老師の法話に感銘し、円覚寺僧堂に入門。予定では３年半のつもりでしたが、横田老師の「もっと何かをつかむまで、ゆっくり修行しなさい」という言葉で、５年間の修行になりました。「蝸牛（かたつむり）登らば登れ富士の山」（山岡鉄舟）と励まされたそうです。修行が３年を過ぎた頃、後輩の指導にも目が向くようになり、不器用にみえる後輩に「ここで頑張り続けることが大事なんだ」と言えたとか。僧堂では暖房も冷房もありません。足袋や靴下も履かず、冬はあかぎれ、しもやけに苦しみ、夏は毎日風呂にも入れず、蚊に刺される修行生活でした。そして、現在は報恩寺で法事など「お坊さん」の仕事を習得中です。真剣に自分とは何か、どう生きるかを探求し、修行を続ける大森さんの姿に、私も学ぶところが多いと感じました。

（市民記者　福田満）

市長からのメッセージ

令和３年を新たな気持ちで迎え、新型コロナウイルス感染症の縮小を願っておりましたが、栃木県でも昨年12月中旬から、感染拡大が著しく、一段と厳しい状況となっております。

１月７日に東京、神奈川、埼玉、千葉に対する「緊急事態宣言」に続いて、14日には栃木を含む７府県に対しても追加発令されました。

本県では、新年となってから１週間の人口10万人当たりの新規感染者数が、東京、神奈川に次ぐ３位となるほか、１日１００人を超える感染者が連続して確認されるなど、感染拡大が止まらない状況から、昨年４月以来、国の緊急事態宣言の再発令となりました。

これにより２月７日までの間、国、県と連携しながら市民の皆さんには県内外を問わず不要不急の外出自粛、特に夜８時以降の外出自粛をお願いするとともに、飲食店などに対しましては営業時間の短縮を要請することとなりました。

市民の皆さん、特に飲食店などを経営されている皆さんには非常に影響の大きい要請となりますが、この度の爆発的な感染拡大を迅速に抑制するため、また今後、医療崩壊を未然に防ぐためにも皆さんのさらなる協力をお願いします。

現在、県内の状況（１月13日現在）ですが、約９６０人が入院調整中となっております。これは今後、感染症にかかってもすぐには入院することができないということを意味しています。そのような状況をご理解いただき、家族や大切な人を守ることはもちろんですが、自分自身の命を守るためにも感染防止対策の徹底と不要不急の外出の自粛をお願いします。本市でも、佐野市医師会や医療機関と連携し合い、医療体制の確保に向け、できる限りの協力を行ってまいります。

（１月14日　記）

岡部正英

今回の表紙　「梅林公園の梅」令和３年１月１２日撮影
朝露が凍り、梅の花が輝いて見えます。梅林公園の梅は、例年２月下旬ごろ見ごろを迎えます。春はもうすぐそこです。

※市のフェイスブックでも、市内のイベントなどの様子をお知らせしています。ぜひ、ご覧ください！

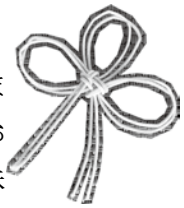
１０年の活動に表彰状「ふくろう隊」

上羽田町会にあるボランティア団体「ふくろう隊」が昨年１０月、県の教育委員会より表彰を受けました。ふくろう隊は東日本大震災の年に「自分の街は自分たちで守ろう」と町内の有志６５歳から７９歳までの男性で結成されました。主な活動は吾妻小学校登下校のパトロール、高齢者の支援作業、街の環境美化作業などで、尽力されて１０年、その功績が認められての表彰でした。

代表の横塚さんに伺うと、その名は町内の神社境内に住みついたアオバズクから、地域を見守る活動にふさわしいと名付けられたふくろう隊。「無理せずできることを楽しく」を合言葉に、地元に寄り添う活動を続けていきたいと話してくれました。

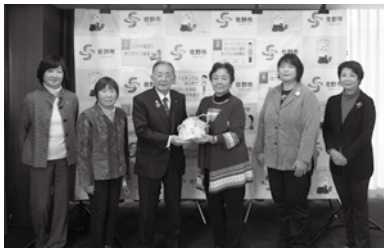
（市民記者　山﨑ちか子）

シトラスリボンで差別のない佐野市



シトラスリボンは、コロナ禍での差別や偏見をなくすため、愛媛の有志から始まりました。 愛媛特産の柑橘（かんきつ）にちなみ、シトラス色のリボンを身につけて「ただいま」「おかえり」の気持ちを表す活動です。リボンの３つの輪は、地域・家庭・職場（学校）を意味します。

令和２年１２月２１日(月)、本市でも連日感染者が増える中、男女共同参画ネットワークさのは、シトラスリボン運動に賛同し、市職員にリボンを身につけてもらうことで、市民の人権啓発に役立ててほしいという思いから、会員手作りのリボン７５０個を市に寄贈しました。



男女共同参画ネットワークさのは、佐野市合併の年に設立され、誰もが平等に心豊かに生きられる社会の実現を目指し、１２団体、約３００人の会員がさまざまな活動をしています。ぜひ仲間になって、ご一緒に楽しみながら住みやすい「佐野市」を考えてみませんか？（市民記者　永倉文子）

佐野弁 ばんざい

技術的に劣っている大工を、ブッツケデークとかセッチンデークなどといった

昭和のなかば頃まで農家はおおむね木造建築でした。麻のくきで葺（ふ）いた屋根は、通称〝オガラ屋根〟、あるいは〝オガラブキ屋根〟と呼ばれていました。この頃、農家は昔風の家を現代風な家に建て替える過渡期（かとき）にありました。大工は猫の手も借りたいほどの忙しさでした。数いる中には、技量の劣る大工がいて、このような大工をへっぽこデークとかへぼデークなどといっていました。しかも下手なくせに手抜きをし、やたらに釘を打ち付けたり、仕事が雑だったりしたので、この大工をブッツケデーク、またはオッツケデークなどといいました。

「ブッツケデークが建てた家だって、最初、見た目ニャーいいけどさあ。造りが雑で手抜きだから、がたが来るンナ（のは）かなりハエー（早い）ダンベよ」

農家には昭和のはじめ頃まで、ほっ建て小屋のような粗末な造りの便所がありました。それを外便所（そとべんじょ）といいましたが、まれにセッチンという人もいました。セッチンとは仏教語（禅宗の用語）で便所のこと、漢字では雪隠と書きます。拙（つたな）い大工は便所ぐらいしか建てられないということから、明治の人の中には、あざけってセッチンデークといいました。

昭和になると、内便所のある農家が増えてきました。禅宗では便所のことを雪隠というほかに、高架（こうか）ともいいました。内便所は上（高い所）にあるというので、正しくは上高架（かみこうか）ですが、訛（なま）ってカミゴカ・カミコーカといいました。これがさらに変化してカミオーカともいいました。

（市民記者　森下喜一）